

# 官邸崩壊

高嶋哲夫

第五回

## 第四章 決断（承前）

3

明日香は、廊下の角に身を隠したまま銃を構え直した。

階段を駆け上がってくる靴音が聞こえる。

明かりが消え、あたりは薄暗い。三階と吹き抜けからの光だけだ。

四階に上がって来たのは七人だった。最後の一人を銃で撃ち、発煙弾を投げて、三階に駆け下りていく。銃声で行った者たちが戻ってくる。騒ぎは大きければ大きいほどいい。三階の配電盤に近づきやすくなる。

三階にかけ下りながら閃光手榴弾せんこうを投げて、廊下の隅にうずくまって目を固く閉じて耳をふさいだ。

閃光手榴弾はフラッシュバンとも呼ばれ、強烈な爆発音と閃光を放つ。近くにいる者は一時的な失明、目まい、耳鳴り、難聴が起こ

りパニックにおちいる。しかし、有効なのは短時間だ。英国SASが採用して以来、世界中の軍隊、警察、特殊部隊で使用されている非致死性兵器だ。

明日香が目を開けると、廊下には複数の迷彩服の男たちが顔に手をやってうずくまっている。

手前の男の頭を蹴り上げて気絶させると、監視カメラを銃撃していった。

二階から駆け上がって来る、さらに多くの足音が聞こえ始めた。同時に怒鳴り声が響いた。

「敵は三階だ。全員、三階に向かえ」

「監視カメラが破壊された」

明日香は発煙弾を発火させて階段とエレベーターの前に投げた。

辺りは煙に包まれ、大混乱に陥<sup>おちい</sup>っている。散発的に銃声も聞こえた。敵味方の区別がつかなくなった。

さらに二階にも複数の発煙弾を転がす。階段付近に白煙が立ち込めて、怒鳴り声と時折り銃声が混じった。

混乱にまぎれて二階に降り、前回と同様に給湯室に駆け込んだ。

監視カメラさえ破壊すれば、配電盤を壊す必要はない。

中ホール前の混乱は続いていた。換気口が開けられ、ファンはフル回転しているが、まだ煙は残っている。

「なんとかして中ホールを通り、大ホールに入る。そして、妨害電波の発生器を破壊する」

呟きながら、弾みをつけて給湯室を出た。反対方向に発煙弾と閃光手榴弾を投げた。騒ぎは他の階にも広がっている。

明日香は背筋を伸ばし、正面を見すえて歩いた。テロリストたちが明日香にぶつかりながら通りすぎていくが、気づく者はいない。

このまま大ホールまで行き、妨害電波装置の近くに手榴弾を置いてくるか。しかし、爆発で人質たちに被害が出るかもしれない。

もし新崎総理が怪我でもしたら、と考えると積極的にはなれなかった。最初に人質たちを逃がすべきか。

落ち着け、誰も私には気づかない、口の中で唱えながら歩いた。中ホールの入口付近の混乱はかなり収束していた。

明日香はさりげなく閃光手榴弾を取り出し、入口に向けて転がした。激しい音と光で見張っていたテロリストが、その場にしゃがみこんだ。

監視カメラに銃口を向けて引き金を引く。

「敵が紛れ込んだ。エントランスホールだ。二階にもいるぞ」

叫びながら発煙弾を置いていく。煙が立ち込め、視野がさえぎられる。

大ホールから複数の悲鳴が上がっている。大部分が女性の声、人

質たちだ。

中ホールを出たところで、大ホールの中が見えた。中は大混乱に陥っている。人質たちが立ち上がり、その周りをテロリストたちが短機関銃を構えて威嚇しながら、座るように大声を出していた。

「座れ。立っている奴は、撃ち殺す」

怒号と共に銃声が響いた。テロリストの一人が天井に向かって銃を撃っている。悲鳴が上がり、騒ぎはさらに大きくなる。

銃声が響き、一人の人質が倒れた。人質たちの動きが止まり、緊張がホール内を支配した。明日香はテロリストの一人に銃の照準を合わせた。

「皆さん落ち着いて。味方が来てくれたようです。もうしばらくここで待ちましょう」

新崎の声が聞こえる。それに通訳の英語が続いた。人質の一人が座ると、次々に座っていく。

明日香は最後の閃光弾を中ホールの入口に投げた。

閃光と轟音があたりを支配した。

明日香は廊下の隅に倒れた。自動小銃をさり気なく大ホールの電波発生器に向ける。

目の前を複数のテロリストが横切っていく。

一人のテロリストと目が合った。銃を明日香に向ける。

二発の銃声が響いた。一発目でテロリストが倒れ、次の銃声で電波発生装置が砕け散った。

「敵だ。女が紛れ込んでいる。バンドナを巻いた女だ」

男の怒鳴り声と共に銃声が響き始める。左腕に激痛を覚えたが銃を撃ちながらその場を離れ、まだ漂っている白煙の中に飛び込んでいった。

何度もテロリストたちにはぶつかりながら階段に向かって走った。

四階の部屋に戻ると、スーザンが心配そうな顔を明日香に向けてくる。

「下はすごい騒ぎ。銃声もすごかった。てつきり、あなたがやられたと思った」

「訓練を受けてるって言ったでしょ。私の仕事は総理を護ること。仕事はまだ終わってない」

「血が出てる」

スーザンの言葉で左上腕を見ると、迷彩服が血で濡れている。袖をたくし上げると肉がえぐれていた。銃弾がかすったのだ。傷を見ると急に痛み出した。スーザンが救急箱から消毒液と包帯を出した。

高見沢は目をつぶったまま動かない。喉元が動くのは生きている

証拠だ。

明日香はスマホを立ち上げた。数え切れないほどのメールが入っている。おそらく、百以上だ。

「携帯電話の電波が復活しました」

明日香が高見沢に向かって言うと、薄く目を開いた。

「くそっ」

ライアンは吐き捨てるような声を出して壁を蹴りつけた。

結局、侵入してきた女は逃がしてしまった。五階と四階の配電盤と監視カメラ、三階の監視カメラの一部を壊されてしまった。五階と四階は、配電盤を修理しても監視カメラは使えない。

おまけに電波発生器を壊されてしまった。女の目的はこれだったのだ。今ごろは、外部と連絡を取っているに違いない。

女は五階か四階に潜んでいるのか。それとも、すでに三階か。監視カメラを壊されたため、発見は困難になっている。

「三階の階段に見張りを立てろ。四階から降りてくる者があれば射殺しろ。残っている監視カメラの映像に注意しろ。おかしい行動を取る者がいれば、ただちに報告するんだ」

ライアンは苛立った口調で、部下に指示した。

「プリンスはまだ見つからないのか。すでにアメリカ本土では交

渉が始まっている。いつプリンセスの出番が来るかもしれない。急ぐんだ」

ライアンはスマホを出してもう一度、写真を見た。

ふと、忍び込んできた女がプリンセスかと思ったが、それはありえない。女は訓練を受けたプロだ。

スカイホテルの記者クラブはマスコミ関係者であふれていた。六本木のヘリ墜落現場に行っていた記者たちが、副総理の演説があると聞いて戻ってきたのだ。

遠山は、副総理の国民に向けての演説を考えていた。

副総理はテロリストの要求については何も話さなかった。しかし友人の官邸に近い警察官僚から、三年で十万人の難民受け入れ要求があったと聞いている。世界はこの要求を支持するだろう。しかし日本にとっては高いハードルだ。

だが、これだけではテロリストにとって、他国にまで来て命を賭けた行動に何のメリットもない。政治家者として考えれば、ありえない。必ず別の要求があるはずだ。おそらく金だ。十億円か二十億円か。それとも、それ以上の金額なのか。知り合いの官僚が隠しているのか、それとも官邸か。

遠山は考え込んだが、納得できる考えは浮かばない。

警視庁が自分たちを国会記者会館から遠ざけたのは、国道二四六号を挟んで官邸のすぐ前で危険であることも間違いないが、再度突入する可能性も大いにありうるということだ。見せたくない行動を取る可能性もあるのだろう。

しかし、官邸内については何の情報もない。これについても副総理は触れなかった。ふと、遠山の脳裏に新崎総理の姿が浮かんだ。背筋を伸ばし、いつも急ぎ足で歩いている女性総理だ。質問に答える前には一瞬、首をかしげて考え込む仕草をする。その横か背後には、常に長身の若い女性が寄り添い周囲に目を向けていた。夏目明日香という女性警護官だ。彼女の表情と仕草からは、新崎に対する尊敬と、何としても護るという意志を感じた。彼女もすでに射殺されたのか。

スマホを出して本社の友人の記者を呼び出した。

「データを送ってほしい。夏目明日香という総理付きの女性警護官だ」

〈彼女がどうかしたの〉

「知ってるのか」

〈数週間前に取材したことがある。総理の警護官という企画で。やる気満々という印象を受けたけど。でもデスクからストップがかかった。警護官が目立ちすぎると、国家の不利益を招くって。彼女が



狙われると気の毒だ、とも言ってたけど、官邸か警察庁から何か言ってきたんだと思う。目立つとまずい仕事だものね。でも、その通りになった。皮肉ね。そのときのデータがある。それを転送する。ちよつと変わった家族だった」

スマホを切つてから、一分もたたない間にファイル付きのメールが送られてきた。

明日香の家族構成や経歴、住所が書いてある。父親は画家。母親は保険会社社員。弟がいるが、職業は——何も書かれていない。理工系大学を中退している。

住所は——阿佐ヶ谷だ。

遠山は官邸の方を見た。いつもと同じ高層ビルが並んでいるだけだが、六百メートルほど先に木々に囲まれた瀟洒な官邸があり、そこでは百人余りの人質がテロリストに囚われている。

4

ノックの音にドナルド大統領は顔を上げた。

首席補佐官が一枚の紙を持って入ってきた。

大統領は引つ手繰るようにそれを取った。スーザン・ハザウェイについての情報だ。

ワシントン・ポストの政治記者で、二十七歳。現在、アンダーソン  
國務長官の取材記者として同行している。

この女も総理官邸で人質になっているのか。

写真が付いているが見覚えはない。ブロンドの美しい女だ。会っ  
ていれば、記憶に残っているはずだが。

生まれは——シカゴだ。一九九一年生まれ——。

大統領は視線を止めた。もう一度、女の顔を見直した。わずかな  
がら、おもかげ面影がなくもない。ファミリーネームはハザウエイか。その  
名は、大統領の脳裏から過去の記憶の一片を引き出してくる。しか  
しそんなはずは——。

「どうかなされましたか」

首席補佐官が覗き込むように見ている。

「何でもない。日本の総理と——いや、副総理と連絡を取ってくれ。  
今後の対応を相談したい」

「我が国の対応は決まっています。テロリストとは交渉しない。ジ  
ームズ・レポートの公表と二億ドルの身代金など論外です」

「日本の副総理の国民への呼びかけを聞いたが、テロリストの要求  
については触れていなかった。賢いやり方だ。しかし、要求は来て  
いるに違いない」

「裏で金で解決しようとしているはずです。日本式の汚いやり方で

す。前例のある国ですから」

「やはり、レポートの公表はムリだ。あれが公になれば、直ちにEPAが乗り出してくる。建設中の工場の工事が中止になるばかりでなく、操業中のシェールオイル、ガス掘削場も止めなくてはならない。EPAの調査は長期にわたる。結果によっては、操業中止だ。私の政策にも大きな停滞が起こる」

EPA、つまりアメリカ合衆国環境保護庁は環境問題を取り扱う官庁だ。市民の健康と自然環境の保護を目的に活動している。

本部はワシントンDCにあり、正規職員数は約一万八千人、年間予算七十三億ドルの巨大組織で、大きな権限を持っている。水、大気、土壌、生物、衛生、法律などの専門官により構成され、大気汚染、水質汚染、土壌汚染などに対する司法捜査権を持っている。

大手自動車会社の排出ガス基準に対する不正に、最大百四十七億ドルを支払わせた実績がある。

「EPAの行動は、私の権限では止めることはできない。無理をすると後で必ず問題になる」

「テロリストとは一切の交渉をしない。この態度を貫くべきです。国民にはそのように訴えたらどうです」

「日本の状況を知りたい。それからだ」

大統領は不愛想に言った。

十分後には日本の副総理と電話がつながった。

大統領が副総理と話すのは異例のことだ。梶元などという議員がいることも知らなかった。

〈大統領、このたびは訪日中の貴国の国務長官がテロリストに拘束されるといふ不測の事態になったことをお詫び申し上げます。すみやかな解放に向けて、全力を尽くす所存です。そのために協力が得られれば、非常にありがたく存じます〉

「日本側の今後の対応を教えてほしい。すでにテロリストからの要求がありましたかな」

大統領は鷹揚おうように聞いた。

〈現在、様子を見守っております。官邸の電話回線はすべて切られ、携帯電話も電波が遮断されています。こちらからの連絡は取れませんが、テロリストからの連絡を待っている状況です〉

通訳を介するためにワントンポ遅れているが、お互いに腹の探り合いといった感じだ。

「我が国に対して、二億ドルの金の要求がありました。ただし、これは極秘に願いたい。あなたにこの国に対する要求をお教え願いたい。国の最高行政政府である総理官邸が武装勢力に占拠され、総理大臣ばかりか我が国の国務長官と大使夫妻が拘束されるという異例の事態

は、警護不備から起こったテロ事件だと言う我が国の専門家もいます。この責任に対しては、事件解決後にゆつくり話し合うことになるでしょう」

梶元の動揺が伝わってくる。ある意味、正しい指摘だからだ。

「まことに遺憾に感じています。しかし、未確認ながら総理と貴国の国務長官、大使夫妻は無事との報告が入っています」

「どこからの情報ですか。私のもとには届いてはいない」

「情報源は言うわけにはいきません」

「我が国の協力が欲しいと言ったが、正確な情報と信頼がまず必要ではないですか」

「率直に言います。人質の安否につきましては、さらなる確認が取れた時点でお伝えします。テロリストからは、五年で十万人の難民受け入れを求められています。さらに、一億ドルの金の要求です」

「それで、貴国はどうか対応するおつもりか」

「どちらの要求も呑まざるを得ないでしょう。総理の命と国務長官の命を守るためには」

一呼吸置いてから返事が戻ってくる。声が震えているのは、この男の気弱さのせいか。

通訳の言葉を聞きながら、自身にかかってきた電話の声が脳裏をかすめた。あれは、国家ではなく私を脅しているのだ。テロリスト

の真の狙いはアメリカ合衆国大統領の私だ。個人に対する脅迫であれば、テロリストとは交渉しないという国家方針など関係ない。日本の総理などカモフラージュにすぎん。十万人の難民受け入れも体のいいカモフラージュだ。日本は受けざるをえない。アメリカもそれにならえということか。

「テロリスト一掃という手段はまだお持ちかな」

〈特殊部隊の突入ですか〉

「警察のS A Tの突入が行われたと聞きました。結果は公表されていませんが、うまく行かなかったという情報も入っています」

〈残念ながら失敗しました。極秘の地下道を使用したのですが、テロリストはすでに爆薬を仕掛けていました〉

「再度、突入する予定は」

〈ありません。何とか話し合いで解決できないものかと――〉

副総理の声が幾分はつきりした。この男は本気でそう思っているのか。

官邸前の現場対策本部横に止められた警察車両の背後に、横田は立っていた。

いつもなら車と人が行き交っている官邸前の通りはひっそりとして、動くものは何ひとつ見当たらない。

道路を隔てた目の前には、官邸が静かなたたずまいを見せている。そのまわりを、千名近い警察官が取り巻いているのだ。今日中にさらに増える。

横田のスマホが鳴り始めた。

画面の名前は夏目だ。一瞬、顔が浮かばなかった。最初の銃撃で完全に死んだと思っていたのだ。では、あのレーザーポインターの光は、夏目が操作していたのか。結局、総理と国務長官、大使夫妻の無事を知らせてきてからは、信号は途絶えている。

〈横田警護課長ですか。夏目です〉

「どこから掛けている。官邸内か」

思わず声が低くなった。官邸内であれば、どこに隠れている。

〈高見沢警部補と変わります〉

〈高見沢です。現在、官邸内にいます。この回線は大丈夫ですか。〉

外部の者には聞かれたくありません〉

声は低く荒いが高見沢に間違いなかった。

「盗聴防止装置はついている。ちょっと待ってくれ。おまえも無事なのか」

横田は他の警察官がいない場所に移動した。

「話してくれ。私しか聞いていない」

〈申し訳ありません。テロリストに漏れると、私たちの命が危ない。〉

現在、官邸の四階にいます」

「あのレーザーポインターの光は、やはりおまえか」

〈気付いておられましたか。テロリストは三十名あまり。イスラム過激派ではなく、傭兵部隊という感じです。英語圏、おそらくアメリカ人です。彼らを中心に日本人も何人かいます。持っている武器も、軽量改良型のM249など、欧米の最新のモノです〉

「ヘリを落としたのもステインガーミサイルだった」

〈すでに要求は届いていますか〉

「私は現場対応だ。そういったことは聞かされていない」

〈了解です。テロリストは二階の大ホールと三階のエントランスホールを中心にいます。地下の状況は不明です。人質の大部分は大ホールに集められています。新崎総理もアンダーソン国務長官もです〉  
高見沢は何度か話すのをやめて息を整えている。痛みで声が出なくなるのか。おそらく負傷している。それも重傷だ。

「エントランスホールでは、ミサイルランチャーや爆薬、その他の武器も見たと夏目が言っています。守りは万全です。各所に爆薬もしかけています。下手に突入すると犠牲者が出るだけです。地下道から侵入しようとしたSATを爆破により全滅させたと、テロリストが話すのを聞いています。マスコミのヘリもミサイルで撃墜したと」



「その通りだ。多数の死傷者が出ている」

〈我々と一緒にスーザン・ハザウェイというワシントン・ポストの記者がいます。テロリストは彼女の発見に固執しています。何か、アメリカから情報はありますか〉

「私は聞いていない。アメリカ側で拘束されているのは国務長官に大使夫妻だ。後は国務省の役人とマスコミ関係者だ」

〈課長の判断に任せますが、彼女については公表しない方がいいと思います。彼女と我々が一緒だとテロリストが知ると、まずいことが起こりそうです〉

「了解した。しかし上には報告しなければならない。マスコミには伏せるようにする。彼女については至急調べてみる」

〈何とかして彼女だけでも脱出させたい。方法が見つければ、また連絡します。夏目が奪ってきたテロリストのスマホがあります。写真とメール、通話履歴を送ります。何か分かれば知らせてください〉

「こちらから連絡することは可能か。警視庁に置かれている政府の国家安全保障会議に直接つなぎたい。副総理が指揮をとっている。テロリストの要求も分かるかもしれない」

〈了解です。マナーモードにしておきます〉

「負傷しているのか。声がおかしい」

〈まだ生きています。他の警護官の分までやらなければ〉

「気を付けてくれ。きみたちが頼りだ」

（この回線は夏目が復旧させました。彼女はよくやっています）

スマホの通信は切れた。

横田は部下に、警視庁本部に行く車を用意するよう指示した。

高見沢はスマホを明日香に渡すと目を閉じた。

その顔からもかなり消耗しているのがわかる。ムリしてしゃべったからだ。

「聞いていただろう。テロリストのスマホの情報を課長に送ってくれ」

高見沢が目を閉じたまま言うが、息遣いは荒く浅い。

明日香は言われたまま、テロリストのスマホに入っていたスリーゾンの写真とメール、通話履歴を横田課長に転送した。

「今後はおまえが対応しろ。俺はこれが限度だ」

「私には無理です。能力の限度はとっくに超えています」

そう言いながら、昨日の昼以来何も食わず、飲んでいないことを思い出した。

「待っててください」

明日香は官邸事務員の部屋に行って、デスクとロッカーから飲み物と菓子類を持ってきた。

高見沢にスポーツドリンクのペットボトルを渡したが、自力では飲めそうにない。

口にあてがうと、彼は三分の一ほどを飲み干した。

スーザンを見ると、オレンジジュースを飲みながら頬に涙を伝わせている。

5

横田の報告に警視庁、対策本部は色めき立った。

官邸内から電話が入ったのだ。相手は新崎総理の警護官、高見沢警部補と夏目巡査部長だ。

梶元は横田を国家安全保障会議に呼び、高見沢に電話をするよう指示した。

電話に出たのは夏目明日香だった。

〈高見沢警部補は負傷しています。かなり重傷です。代わりに私が応対します〉

「副総理の梶元です。総理が拘束されているので、現在、私が国家安全保障会議の議長を務めています。ここには所管の大臣他、警視總監、警察庁長官もいます。正確さと時間の節約のため、この電話はスピーカーにして、他のメンバーと共有しています」

「総理は大ホールにアンダーソン国務長官らと共に拘束されています。現在のところ無事です。残念ながら、私と高見沢警部補以外の警護官はテロリストに射殺された模様です」

覚悟はしていたが、実際に聞くとやはりショックだった。

「最初に銃撃戦があったと聞いています。やはりそうでしたか」

夏目明日香が官邸内の様子を話し始めた。部屋中の者が固唾を呑かたずんで聞いている。

思っていた以上にテロリストは大規模に組織されているようだ。

しかし同時に、行動には違和感を覚えるところもあると、夏目警護官は言っている。受けている訓練の程度が違いすぎるというのだ。

「スーザン・ハザウェイさんのことは聞いていますか。アンダーソン国務長官に随行してきたワシントン・ポストの記者です」

「横田警部補から連絡を受けて、現在調べています。分かり次第、連絡します」

「テロリストの要求は何なのですか。教えていただけませんか。知っておく必要があります」

「その必要はないでしょう。マスコミにも公表していないことです」  
背後で長森の声が聞こえた。

「テロリストと直接やりあっているのは彼らです。敵の行動を推測するには有益です。知らせるべきです」

横田が強い口調で言う。

「十万人規模の難民受け入れと、一億ドルの振り込みです。詳しいことはまた連絡があります」

一瞬迷ったが、梶元は話した。現在、一番の頼りは彼女たちだ。  
〈要求に応じるおつもりですか〉

「政府の基本姿勢はテロリストとは交渉しないということです」  
〈しかし、新崎総理以下、人質の命がどうなるか――〉

「やはり強硬救出しかないということですか」

〈テロリストは十分な武器を所有し、半数以上が高度な訓練を受けた者です。無謀な突入は犠牲者を増やすだけです〉

「S A Tの投入が無謀な突入だったと言うのかね」

〈敵の人数、装備、目的。何も分かっていますませんでした。彼らが官邸についてどれだけの情報を持っているかも〉

「私は警視総監の高山だが、どうすればベストだと思うのかね」  
警視総監の言葉にスピーカーは黙っている。

〈私たちも判断しかねます。もう少し、調べさせてください〉

男の声が変わった。高見沢警部補だろう。  
また連絡しますと言って電話は切れた。

「少し顔色が良くなりました」

明日香は高見沢に言った。ペットボトルが空になっている。水分補給とわずかな睡眠が、多少体力を回復させたのか。

「副総理との会話は聞いていた。頼りはおまえだけだ」

「政府にはすでに要求が届いているようです」

「平気で警護官を殺していったテロリストの要求が、難民の受け入れだと。一億ドルの金は理解できるが」

「私もおかしいと思います。彼らが難民に興味を持つとは思えません。一億ドルは金額が大きすぎるとは思いませんか。副総理の一存では決定できない額だと思います。それに、日本政府の基本対応は、テロリストとは交渉しないということです。この申し出を受ければ、日本は世界から非難を受けます」

「時間がかかるな。どこで折り合うか」

「彼らはイスラム過激派じゃありません。訓練を受けた欧米の傭兵だと思えます。なぜ彼らは日本を狙ったのでしょうか。総理官邸を。それもアメリカ国務長官の訪日時に。疑問だらけです」

「日本の官邸は警備が手薄だからじゃないのか。事実、彼らはあれだけの武器と人員を事前に送り込んで官邸を占拠した」

だがそれは、官邸の警備体制に問題があるということだ。

しかしそれだけではない。明日香の脳裏には何か納得いかないものがある。心に引っかかるのだ。それはテロリストの要求を聞いて、

ますます膨れ上がった。そしてスーザンの存在。

「日本には過去にテロリストに屈した事実がある。言いなりに金を払い、犯罪者を解放した。脅せば屈する国として、テロリストになめられている」

「でも今回は——それだけではない気がします」

「だったら、テロリストはアンダーソン国務長官を狙ったのか。だとすれば、アメリカ側にも要求がいつているはずだ」

スーザンが、何を話しているという顔で明日香を見ている。

明日香はスーザンに現在の状況を説明した。スーザンは神妙な顔で聞いている。話し終わるとスーザンが口を開いた。

「日本はテロリストの要求を呑むつもりなの」

「私には分からない。でも、新崎総理なら絶対に拒否しろと言うでしょうね」

明日香は自信を持って言い切った。高見沢は反論しない。

「アメリカにもテロリストから要求が行ってるのかしらね」

「あなたはアンダーソン国務長官に随行したのね」

明日香はスーザンを見つめた。この女性が、テロリストが探しているプリンセス。まさかという思いと、テロリストのスマホにあった写真が交錯しりぞくしている。スーザンがテロリストに捕まればどうなるのか。彼らの口調からは、かなりの重要人物との印象を受ける。

「なんとかして、あなたを官邸から脱出させたい」

明日香はつぶやいて、窓から外をのぞいた。

ドナルド大統領は大統領執務室に一人いた。ここ一日の出来事は心を悩まし、体力を消耗させるのに十分だった。特にスーザン・ハザウェイの出現は考えてもみなかった。

ノックの音に顔を上げた。

同時にドアが開き、入ってきたのはワールド・エナジー・カンパニーのCEO、スチュアート・ランケルだ。

ホワイトハウスに自由に出入りできる大統領の親友として、マスキミの標的にもなった男だ。

ワールド・エナジー・カンパニーは、大手独立系エネルギー会社で、テキサス、オクラホマ、カナダのアルバータなどで天然ガスや石油を採掘、精製している。

天然ガスを一日当たり約二十四億立方フィート生産するが、これは北米で消費する天然ガスの五パーセントにあたる。またカナダでは、オイルサンドから炭化水素油を生産している。そして数年前から、シェールオイルと、ガスの採掘と精製に大規模に乗り出している。

従業員数は約六千名。採掘、原油生産の業界ランクは八位。売上



高、約百四十億ドル、総資産、約四百三十億ドル。CEOの年収は一千万ドルを超えると騒がれた。総資産は十億ドル以上と言われている。

「大統領がジェームズ・レポートの公表を考えていると聞いて駆けつけました。あれは、公表するには科学的根拠が薄すぎます。いたずらに不安をあおることは避ける、という結論に達したと思っていますが」

ワシントン支社長の報告を聞いて駆けつけたのだろう。

「まだ決めたわけではない。テロリストの出方がはっきりしていない」

「日本での総理官邸の人質事件ですか。アンダーソン国務長官と駐日大使夫妻がイスラム過激派に囚われていると聞いています」

「イスラム過激派と決まったわけではない。日米の複数の官僚と警護官が犠牲になった。今もアメリカ国民が拘束されている。これは無視できない」

「ドナルド大統領らしくないですね。もつと合理的に考えると思っ  
ていました。国務長官も大使も取り換えはたやすい。官僚と警護官  
はさらに簡単だ。テロの非道さを世界にアピールすることもできる。  
そのようなテロリストには断固屈することはできないと。シェール  
オイルとガスの生産を止め、工場建設の凍結ともなれば、失業者は

倍増します。再びアメリカは、中東の石油に依存することにもなります。そっちの方に国民は注目します。ツケは自分たちに回つてくるとね」

ランケルは大統領をにらむように見つめ、一気にしゃべると、ソファアに倒れるように座り込んだ。

「だが日本が今回も人道主義に走れば、我が国も交渉を拒むわけはいかない。日本への要求は、五年で十万人の難民受け入れと一億ドルだ。日本は難民については受け入れるだろう。そうすれば我が国も——」

「大統領、あなたは私をからかっているのかね。レポートを公表すれば、ただちに環境保護庁が動き出す。それに伴い、反対派の住民運動はますます激しくなるだろう。プロジェクトは半年は遅れる。下手をすればもつとだ。おまけに、様々な要求を突き付けてくるだろう。我々にはできることと、できないことがある。これは、できない方だ」

ランケルの語調が陰しくなった。彼の中にはチェス・ドナルド大統領誕生には、自分の力が大きく影響しているという自負がある。そしてそれは事実だ。

ランケルはソファアから立ち上がり、大統領の近くに寄った。

「チェス、一体どうしたんだ。一年半前、我々は何を誓ったんだ。

共にアメリカを変えようと語り合った。昔のように強く、豊かなアメリカの復活だ。わが国には中東に頼らなくとも、エネルギーは尽蔵にある。シェールオイル、シェールガスの形でだ。我々はそれを取り出す技術を手に入れた。真偽も定かではない論文で、それを投げ出そうと言うのか」

「そうじゃない、スチュアート。少し待てと言っているのだ。私が責任を持って何とかする。だから、もう少し待て」

「テロリストには屈しない、これが国の方針ではなかったのか。たとえ、友人のドミニク・アンダーソンを失っても。日本の女性総理に気を遣っているわけじゃないだろ」

ランケルが語りかけたが大統領は答えない。

「来年は中間選挙が始まる。それが終わるとすぐに大統領選挙だ。今度も私と我が社が総力を挙げて応援しよう」

やはり大統領は無言だった。

ノックと共に首席補佐官が入ってきた。

二人の顔を見て話の内容は悟ったようだ。ランケルが首席補佐官に鷹揚に語りかける。

「大統領は疲れておられるようだ。気弱になっている。きみからも最良の方法を示唆しきしてくれたまえ」

「アメリカはテロには屈しない。たとえ、身内が犠牲になろうとも。」

この鉄則は護るべきです。何が起こっているのです。ランケルCE  
Oのお言葉のように、大統領は弱気になっています。人質になって  
いるアンダーソン国務長官も、我々と同意見のほうです。彼は喜んで  
我々の決定を受け入れます。彼のためにも、ここは英断すべきで  
す」

首席補佐官の言葉に、大統領は顔を上げた。

「ネイビーシールズの突入か」

「日本には任せておけません。特にあの老人、副総理には。過去と  
同じ間違いを繰り返すだけです」

「突入でどの程度の犠牲者が出る」

「場所が日本の総理官邸です。まずは、アメリカ軍の行動がどれほ  
ど許されるかどうかです。日本の警察との共同作戦ということであ  
れば可能です」

ただ、と言って、首席補佐官は言葉を濁している。

「国務長官が何かをしゃべり出すか、あるいは国外に連れ出される  
前に救出する必要があります。もし、そういうことがあればの話で  
すが。彼の身は多くの国や組織がほしがらるでしょう。合衆国国務長  
官の持つ情報です。それを阻止するには——」

首席補佐官の言葉が終わる前に大統領は立ち上がり、ランケルに  
向き直った。

「これから国家安全保障会議だ。また連絡する」  
「やっつと、元の強い大統領に戻りましたな」  
ランケルが笑みを浮かべて大統領を見ている。

6

ホワイトハウス地下のシチュエーションルームには、国家安全保障会議のメンバーが集まっていた。

アメリカ国家安全保障会議、通称NSCは大統領、副大統領、国防長官、エネルギー長官、そして本来であればそこに国務長官を加えて正規メンバーとされる。

日本の安全保障会議スタッフが各省庁からの寄せ集め集団にすぎないのに対し、専門の大規模な組織を抱えている。特に世界中に情報網を持つ強力な情報機関、CIAの存在は大きい。

正面の大型ディスプレイの一つには、日本の総理官邸が映っていた。

「生死を問わずということですね。国務長官が日本国外に連れ出される前に決着をつけるということは」

国防長官は前方のディスプレイに目を向けたまま、部下に指示を出した。日本の首相官邸の鮮明な衛星画像が映し出される。リアル

タイムの映像だ。

「犠牲者は避けることはできません。テロリストは地対空ミサイルを持つているので、ヘリでの屋上からの突入はリスクが大きすぎます。敷地外周部の高さ五メートル以上の塀を超えて、ということになります。この第一警戒線は、塀の上に監視カメラとコード型の圧力感应センサーが設置され、侵入者を見張っています。これらを事前に切る必要があります」

「誰がどのように切るんだ」

「日本側に頼むしかありません。しかし日本政府が突入に消極的であれば、事前に官邸に電気を送っている電源設備を狙った小規模な爆撃を行います。官邸の全ての電源を切るためです。同時にネイビーシーल्ズが第一警戒線を越えて官邸敷地内に潜入して、攻撃を開始します。しかしこれは数分の時間しかありません。五分以内に予備電源が動き出します」

「かなり乱暴だな。犠牲者が相当数出る」

「最悪の場合、人質の七十パーセントが犠牲になるでしょう。国防総省の試算です。このままだと日本は要求を呑むでしょう。難民受け入れは公に、金は秘密裏に。このテロリストたちが資金を得て世界に放出されれば、さらにテロは広まり犠牲者は多くなります」

考え込んでいた大統領が顔を上げた。

「いつ実行できる」

「すでにネイビーシールズ三十名の部隊が厚木基地あつきに待機しています。日本サイドとの協議で現場周辺に移動し、今夜にでも作戦に入れます」

「待ってください。それはあまりに早急すぎます」

首席補佐官が割って入った。

「官邸には日本の総理もいます。もし、総理が犠牲にでもなれば、国際社会が黙ってはいません。アメリカは自国の国務長官を救出するため他国で軍事行動を起こし、日本の総理を犠牲にしたと。しかも総理は女性です」

「だから共同作戦なのです。日本の警察や自衛隊に何ができると言うのです。実戦経験のない張子の人形にすぎません。もし、かつてと同じように日本政府の判断に任せて、テロリストに金を与えて脱出の手配までするようなことがあれば、取り返しがつきません。同様なテロが世界中に広まります。ここはネイビーシールズを投入すべきです」

参謀総長が大統領を見ている。彼の顔はやる気満々だ。

「ネイビーシールズの官邸前への移動を日本に打診してくれ。これは大統領の強い意向だと伝えて」

「準備はできています」

国防長官が部下に指示すると部下はシチュエーションルームを出て行った。

明日香は必死で考えを巡らせていた。何とかしてスーザンをここから脱出させる。次に新崎総理とアンダーソン国務長官、他の人質たちを救出する。そして高見沢を医者に診せる。そのすべてが自分にかかっている。

明日香のスマホが震え始めた。画面を見ることもなくタップした。

〈やっと通じた。姉ちゃん、元気か〉

驚くほど明るい声が聞こえてくる。弟の純次じゅんじからだ。

〈母さん、昨夜からテレビにかじりついてる。一睡もしてないぜ。

メシも作らないし、食わないし。テレビの前を離れるのはトイレのときだけ〉

「あんた、なんで電話なんかしてくる——」

〈そんな言い方ないだろ。やっと通じたんだ。テレビで官邸が占拠されたって知ってから、何百回かけたか。警護官が殺されたって聞いたから、姉ちゃんも死んだかと思ってた。母さんに変わるぜ。安心させてやれよ〉

〈明日香ちゃん、生きてたの。母さん、てつきり——〉

あとは半分泣き声で聞き取れない。



「分かった。私は大丈夫だから安心して。今は工作中。ジュンに変わって」

〈姉ちゃん、もっと話してやれよ。母さんは――〉

「電話が通じたことは誰にも話したりメールしちゃダメよ。絶対に。私たち三人の命に係わることだからね。バカなあんたにも、分かるでしょ。二度と、電話してきちゃダメ。必要なときは、お姉ちゃんから電話する」

〈分かった。姉ちゃん、総理大臣の警護官だったな。横に総理かテロリストがいるのか。俺は――〉

明日香は電話を切った。

「母と弟です。テレビを見て、心配してたみたいです。二度と電話しないように言いました」

高見沢に言うと、頷いている。

スマホが震え始めた。放っておいても止まりそうにないので、明日香はしかたなくタップした。

〈父さんからも伝言だ。ガンバレって〉

それだけ言うと電話は切れた。

「警部補も家族に電話しておいた方がいいですよ。死んだと思われる、心配してます」

「俺はいい。それより、これからどうするか考えろ」

高見沢は再び目を閉じた。痛みがひどくなったらしい。顔色もさ  
らに悪くなっている。

明日香は救急セットの入ったカバンを引き寄せた。

遠山はスマホを手で覆い、声を低くしてしゃべった。

まわりには同じマスコミ関係者が数百人いるのだ。全員が情報を  
求めて必死に動いている。

「生きている警護官がいるらしい。その警護官から、対策本部に電  
話が入った。これは極秘だ。新聞発表なんてできない。俺は友人の  
警察幹部からやっと聞き出した」

〈彼の名前は分からないの〉

「教えてくれなかった。しかし、彼じゃなくて彼女だ。国家安全保  
障会議と警視庁では把握している。これも極秘だ。生存が分かれば、  
テロリストたちが見つけ出して殺す。外部に仲間がいれば、家族が  
危険に晒さらされる可能性もある」

〈生き残りは彼女一人なの〉

「そうらしい。まだ、上には言うな。すぐに漏れる。また何か分か  
つたら知らせる」

遠山はスマホを切った。電話の相手は夏目巡査部長について調べ  
てもらった女性記者だ。遠山自身に何かあった場合は彼女が引き継

ぐ。そのための電話だ。

女性警護官。官邸にいたのは一人しかいない。遠山はスマホのメールを出して、添付ファイルを開いた。

夏目明日香巡査部長、二十七才。自宅は阿佐ヶ谷、両親と弟と一緒に住んでいる。電話番号が書いてある。

遠山は番号を押した。

〈どちらさまですか〉

受話器はすぐに取りられ、小さな声が返ってくる。声は小さいが男のモノだとわかった。おそらく弟だ。

「純次くんですか。私は明日香さんの友達です」

一瞬、沈黙する気配が伝わってくる。用心しているのだ。彼は姉が警護官として官邸にいることを知っているはずだ。

〈あんた、誰だ。俺は純次だけど、俺はあんたなんて知らないよ。

姉ちゃんが家にいないのは知ってるだろ〉

半分居直り、半分怯えたような声が返ってくる。

「悪かった。どうしても話したかったんだ。一度会えないかな」

〈俺は話したくないよ。もう、かけないでくれよ〉

「お姉さんの明日香さんについて——」

電話は切られた。彼は明日香が生きていることを知っている。彼らは連絡を取っている。遠山はそう直感した。

もう一度、電話をしようとして思いとどまった。

時計を見た。昼までにまだ三時間ある。ここで何かあるとしても、午後になってからだろう。勝手に推測した。

後輩の記者に大きな動きがあつたら連絡するように念を押して、JR新橋駅に向かった。一番近いJRの駅だ。

(つづく)